令和五年　長月　752号

むなかた

目次

中津宮　七夕祭　3・2
宗像みあれ芸術祭二〇二三　4
宗像護国神社戦没者慰霊祭 斎行　5
風鎮祭　5
神宝館だより・みこころ　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7

よって！　神道は「空間の信仰」といわれる。古代、日本人はどのような場所に神聖なるものを感じ、どのような自然環境に神を見たのだろうか▼宗像信仰の中心である沖ノ島は、島全体が原始林に蔽われ、頂の一ノ岳には、巨大で剥き出しの岩頭が聳える。沖ノ島は、島そのものが御神体であり、巨大な磐座（いわくら）だと言える。近くに小屋島という岩島がある。古代、御神体島である沖ノ島への入島は畏れ多く、この小屋島において神の島を拝したと思われる。又、辺津宮の高宮祭場では未だ社殿は無く、神の依代としての神籬（ひもろぎ）を神座とし、祭祀が執り行われている。この磐座・神籬を神坐す処とした両空間は、古代日本人の神観念や信仰形態を知る上で極めて稀有な神域として維持されている▼先般、ある新聞のコラムにおいて「神社参道論」なる記事を拝見した。執筆者の持論として「神社の参道は長いほど有難く、宗像大社は本殿までの参道が短いため、有難みを感じない」といった内容であった。当社を比較対象として語る必要があったのか　甚だ疑問ではあるが、一面的で神社を見るのではなく、古（いにしえ）より繋いできた「悠久の空間」に思いを馳せ、神々の息吹を感じて頂きたい。（床）

中津宮七夕祭

八月七日、午後八時より中津宮末社牽牛神社、織女神社にて七夕祭が斎行された。境内は、多くの七夕飾りや竹灯籠によって彩られ、多くの参拝者で賑わった。コロナ禍により中断されていた七夕踊りや緑地公園でのイベントも四年振りに行われた。

大島は、七夕伝説発祥の地と言われており、神事は鎌倉時代まで遡ることが出来る。伝説では、渡唐した青年が織女を連れて帰国する際恋仲になるものの、その後離れ離れになり、織女を忘れられない青年は神のお告げにより中津宮に詣で天の川に盥(たらい)を浮かべ水鏡に写る織女との逢瀬を楽しんだというものである。

他にも宗像には、織工女の話が伝わる。日本書紀には、応神天皇の命により呉国に渡った阿知使主が応神天皇四十一年(三一〇)に兄媛、弟媛、呉織、穴織の縫工女を連れ帰り、その内兄媛を宗像大神に献じたということが記されており、先の伝説より数百年前の話であるが七夕伝説への関わりも感じられる。

……

竹灯籠について

この度境内を彩った「竹灯籠」は、島内の氏子はじめ子供たちに参加してもらい作成した。作成に際して、日本初・世界初の竹あかり総合プロデュース集団「CHIKAKEN」にお手伝いいただいた。

「CHIKAKEN」は”自分たちのまちは、自分たちで灯す“として十五年以上に渡り、竹あかりを作成し灯してきた集団であり、竹あかりが新たな日本の文化として、希望の灯火として、一〇〇年後の未来にも受け継がれていくことを目指している。(HPより抜粋)

https://chikaken.com/

CHIKAKEN　ホームページ

宗像みあれ芸術祭二〇二三　開催記念
神迎え　海と未来を繋ぐ　津軽三味線×和太鼓

十月一日より開催の「宗像みあれ芸術祭二〇二三」に先立ち、宗像の海の神様へ想いを馳せ、子どもたちの新しい芸術体験のひとつとして力強く、心躍る津軽三味線と和太鼓の演奏が開催されます。

奏者は日本古来の自然観を受け継ぎ世界につなぐ、津軽三味線奏者の山口ひろし氏と、障がい者長崎打楽団・瑞宝太鼓となっている。古くから続いてきたこころの祭り「みあれ祭」そして、「宗像みあれ芸術祭」に向けて奏者たちの共演を、ぜひお楽しみください。

宗像みあれ芸術祭ホームページ
https://miare-art.com/

●会　期
九月十五日（金）　十八時三十分　開演
福岡銀行ＦＦＧホール
福岡市中央区天神二―十三―一
九月十六日（土）　十四時　開演
宗像ユリックス・ハーモニーホール
宗像市久原四〇〇

●入場料　一　般　：三、〇〇〇円
小・中学生：一、〇〇〇円

●曲　目（予定）
打楽、津軽あいや節、津軽じょんから節、照、千本桜　ほか
※曲目・曲順は変更になる場合があります

●出演者
津軽三味線　山口ひろし
国内外のみならず外務省他からの依頼によりアジア・オセアニア・北米・ヨーロッパ・アフリカ等で公演。邦楽の分野にとどまらず、様々なジャンルのアーティストとの共演も多く、豊かな音の響きやリズムをクリエイティブに表現している。ソロコンサートも各地で開催し、楽しい語り口と共に津軽三味線本来の音色を力強く、繊細に伝えている。

津軽三味線　宮沢莉乃音
四歳の時、知人の紹介で津軽三味線と出会い興味を持ち、三味線の音色と日本文化の深さに惹かれる。山口ひろし氏に師事。

和太鼓　瑞宝太鼓
社会福祉法人南高愛隣会が掲げる『生きる誇りへの、挑戦』を自ら体現する知的障がいのある当事者メンバーで構成されたプロの和太鼓集団。

●お問い合わせ　島田建築設計事務所（古島）
〇九二―七二二―三三一〇

宗像護国神社戦没者慰霊祭 斎行

八月十五日午後五時より、宗像市・福津市それぞれの遺族連合会関係者が参列のもと宗像護国神社慰霊祭が斎行された。

同社は宗像市・福津市の日清・日露戦争に至るまでの記念碑を戦後、宗像郡遺族連合会が譲り受けて、更に大東亜戦争の銘碑を建てて、英霊の平安を祈ったことに始まり御祭神は二、五七六柱の英霊の御霊をお祀りしている。この神社は昭和三十八年に宗像大社の準末社として鎮祭され、当時、宗像市東郷にあった忠魂碑境内が買収されるに伴い現在の宗像市田島の旌忠社跡に鎮座した。昭和三十八年四月五日に地鎮祭を斎行。同年十月十六日に御遷霊祭、同年十月十七日に御鎮座大祭並びに郡合同慰霊祭が斎行された。

同社ではほかに、四月二日に春季大祭、十月三日に秋季大祭、また毎月一日は月命日祭を斎行し、御霊が安らかであることを祈り、英霊たちの尊い犠牲の上に今日の平和があることに感謝の誠を捧げている。

風鎮祭

日本には「二十四節気」・「五節句」のほかに「雑節」と呼ばれる季節の移り変わりをより的確に掴む為に設けられた、特別な暦日がある。一般的には、節分・彼岸・社日・八十八夜・入梅・半夏生・土用・二百十日・二百二十日の九つある。

この中でも、二百十日の厄日は立春から数えて二百十日目の日を指し、「八朔」(旧暦の八月一日)と「二百二十日」とともに、農家の三大厄日とされている。これらの日は季節の移り変わりの目安となる「季節点」とされ、台風の襲来も相まって天気が荒れやすいと言われている。

宗像では、六月中旬に田植えが行われ、それから九月中旬から十月中旬の稲刈りを目指して、その間約三か月に渡り稲の管理を行う。台風や大雨は、農家の方々にとって大切な農作物に大きな被害を与える。このような厄日を無事平穏に乗り越えられるよう祈念する祭りが「風鎮祭」で、当社では毎年九月一日に農業関係者参列のもと斎行している。

二十四節気

立春、春分、夏至など、季節を表す言葉。一年を春夏秋冬の四つに分け、さらにそれを六つに分けたものが二十四節気で「節(せつ)または節気(せっき)」と「中(ちゅう)または中気(ちゅうき)」が交互にある。旧暦の閏月を設ける基準となっており、中気のない月を閏月としていました。二十四節気は、その年によって一日程度前後することがある。

五節句

人日(一月七日)、上巳(三月三日)、端午(五月五日)、七夕(七月七日)、重陽(九月九日)の五つの節句がある。古来より、季節の節目に、神様にお供え物をし、家族・親戚が集まり、無病息災、豊作、子孫繁栄などを願う日のこと。

神宝館だより 77
八万点ノ国宝収蔵

宗像大宮司氏貞手負注文

宗像社と人々（三）

宗像大宮司家の特徴として、神官であり武士でもあるという点が挙げられる。大宮司は先に見てきたような神職・僧職の人々の長であると同時に、武士団の長として家臣団を擁していた。

写真は宗像大宮司氏貞手負注文の一部。手負注文とは戦の後、味方の負傷や戦果を書き上げた文書で、永禄三（一五六〇）年の戦に際し発給されたものである。

ここに記されたのはいずれも氏貞の家臣。深田氏、許斐氏、占部氏、石松氏、吉田氏はそれぞれ古文書に武士としての活動が見える。この時の戦で受けた傷は「槍傷」「石傷」、からだの複数箇所に傷を負った者もあり、生々しい戦の様子が窺い知れる。

これらの家臣の中には神職として活動していた者もあり、『宗像軍記』には、大友側の武士に「宗像大宮司の長袖烏帽子のヘロヘロ矢、何ほどの事あらん」と嘲られた宗像の武士が「神職の者の射たる矢、たつかたたぬかうけて見よ、是神通の鏑矢なり」と述べて見事に敵を射貫くという場面がある。これは後世の創作で、いかにも軍記物らしい華々しい場面であるが、神職と武士という両方の立場を強調する書きぶりには、宗像大宮司家とその家臣の特徴がよく表されている。（津）

みこころ

日中は汗ばむ暑さが続いていますが、朝夕は過ごしやすくなりました。皆さまどうお過ごしでしょうか▼コロナが治まった今、宗像大社には国内のみならず国外からお参りに来る方がとても増えました。以前のような賑わいが戻ってきているんだなととても嬉しく思います。先月、久しぶりに県外へ旅行に行ってきました。商店街に立ち寄ったのですが、食べ歩きをしている人を多く見かけました▼その土地ならではの料理や、流行りのスイーツなど商店街の賑わっている雰囲気のなかで食べるとよりいっそう美味しく感じると思います▼宗像大社では、四月より参拝に来る方の為の休憩所「むなかた茶愉」がオープンしました▼中にはオリジナルスイーツやドリンクなどを楽しめるカフェを設けております。また、八月から新しくシュークリームやお好みのソースを選べるソフトクリーム、厄を消し去るという思いを込めた「茶愉けし餅」も販売しております▼宗像大社内での食べ歩きも可能となっておりますので、境内の景色を楽しみながら召し上がってみてはいかがでしょうか？（三）

第745回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切（順不同）

返却は必要ないよと貸した本あなたが逝くとは思いもせずに　堺　玲子

思いがけない友人の逝去が、貸した本という具体で衝撃の強さが浮かぶ一首になった。気軽に言った言葉がいつまでも記憶に残りそうだ。

野の草に同じと思ひ引き抜きし一握の草にハーブが匂ふ　佐々木和彦

間違ってハーブまで抜いてしまった作者。草の匂いに惜しむ気持ちが出ている。単純化して〈野の草と思ひて抜きし一束にハーブの香りが強く匂へり〉。

妻の杖で石鎚山に這つ上る昔語に甦る祖母　早川　祥三

夫人の杖を借りて山に登ったら祖母の昔語りを思い出したということだろうか。少し分り難いので〈妻の杖借り石鎚山に這い登る昔語りの祖母のごとくに〉と。

キャンベラへ親善のため訪問し初めて見たサザンクロス　秋吉　嘉範

南十字星の思い出。十字星の描写があると更に印象的になるので〈キャンベラの親善訪問で初めて見たサザンクロスのすずしき光〉としてはいかが。

どこぞでは条約の名が和ではなく怨だそうだよ遠い遠い愛　山﨑　公俊

このうたの条約は韓国あたりのものか、終戦後の講和条約のな名に怨の字がつくほど戦争の残す傷はふかい。こなれた口語で詠まれているが内容は重い。

歩きつつひとりしりとり今日はする同じ言葉にゆきつくけれど　吉﨑美沙子

ウォーキング中のことかと想像した。一人しりとりなのでどうしても発想が同じ道筋を通りがちなのだ。また同じ言葉にたどり着いたと嘆く作者が面白い。

どこからか青ガエル庭に住み着いて豪雨の夜は子守唄歌う　本田エリナ

青ガエルの声を子守歌と聞く作者は蛙に家族のような親しみを感じているのだろう。豪雨の夜に蛙の声は聴こえるだろうか、四句は〈雨降る夜〉くらいに。

麻のれん水無月となり設えて心のうちを衣替えする　東　雅子

部屋の模様替えをして気分もあらたに暑い夏の日々をむかえる作者だ。初句と二句を入れ替え〈水無月となり麻のれん設えて〉とすると読み易くなる。

お詫びと訂正

葉月（第751号）7ページ記載のお名前に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

（誤）秋吉　喜範　（正）秋吉　嘉範

◆選者詠

これこそが豪雨と降る中ワイパーを最速にして亀のごとゆく

おしゃべりな孫の去りたる一人居の家に入りくるこほろぎの声

第715回　俳句

迫出した大樟心字池涼し　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（令和五年七月）（順不同・敬称略）

一〇〇、〇〇〇円

世田谷区　葦津　嘉雄
墨田区　島田　鋭子
川西市　上田　侑吾

三〇、〇〇〇円

北九州市　久野　友二

一〇、〇〇〇円

北九州市　大塚　満浩
福岡市　入江　隆文
江戸川区　河辺　吉幸

五、〇〇〇円

横浜市　馬場　陽子
横浜市　宮内奈都子
見附市　小林　和人
松山市　宮内　忠泰
廿日市　山内　博幸
仙台市　齋藤　淑子
周南市　兼重　吉伸
さいたま市　島村　英司
稲沢市　村松由季子

三、〇〇〇円

鹿児島市　田畑美由紀
大阪市　福地　昭義
糸島市　國分　一美

二、〇〇〇円

福岡市　大野　正博
福岡市　菊池　麻美
生駒郡　大野　尚子
生駒郡　大野　雅司
由布市　北野　精治
港　区　竹林　立子
練馬区　山田　耕平
杉並区　亀山　祐子
下関市　藤井　智信
久留米市　松隈　浩志
京都市　知公智之・登紀子
板野郡　小林　大介

むなかた
長月（ながつき） 第752号
2023年9月1日発行（月刊）／宗像大社　〒811―3505　福岡県宗像市田島2331　電話（0940）62―1311（代）　https://www.munakata-taisha.or.jp/

9月 まつりごよみ

1日	総社月次祭	午前11時
	引続き　高宮祭、第二宮・第三宮祭	
	宗像護国神社祭	
	風鎮祭	
15日	総社月次祭	午前11時
	引続き　高宮祭、第二宮・第三宮祭	
23日	秋季皇霊殿遙拝式	午前10時
30日	秋季大祭宵宮祭	午後６時

編集後記

八月、熱戦が繰り広げられた「第一〇五回全国高校野球選手権記念大会」（夏の甲子園）。そんな中、神社対抗の「第四〇回東西神社人野球大会」が伊勢の地に於いて開催され、太宰府天満宮と宗像大社の合同チームにて出場した。参加チームは他に、伊勢の神宮、熱田神宮、東京都、兵庫県の各神社に奉仕する人間で構成されている。当日は天候にも恵まれ甲子園にも負けずとも劣らずの熱戦が繰り広げられた▼コロナにより五年振りの開催となったが、久しぶりに顔を合わせ、参加者一同は話が尽きない雰囲気であった。様々な事象がオンラインという形で可能になった社会ではあるが、直接対面してのコミュニケーションがどれだけ人にとって大切であるかを感じさせられた野球大会であった。

（黒）

宗像大社